

---

Nacht

# 置き去りにした一つの思い出

灰色日記帳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Nacht 置き去りにした一つの思い出

### 【Zコード】

Z0205Y

### 【作者名】

灰色日記帳

### 【あらすじ】

「女子中学生変死事件」。

鶴村にて、一人の少女が何者かに惨殺され、見るも無残な姿で発見された戦慄すべき事件。その事件が起きてから一年が経過した、九月二十四日。

犠牲となつた少女と親しかつた少年、一月は生前に少女が祖母と一緒に暮らしていた家へと向かう。事件の真相、そして、少女の死の真相を探る為に。そこで彼が目にした物は……

断罪、贖罪、そして悲劇の物語が今、紐解かれる。

## 其ノ零 ～一月ノ追憶～（前書き）

どうも、他の連載小説でお世話になっている方は改めまして。  
初めての方は初めて。灰色日記帳と言う者です。

これまで連載中の作品では「虹色冒険書」という名前を使つていま  
すが、この作品ではその名前は余りに不釣り合いなので、違つた名前  
を使わせて頂きます。

この小説は、「Fragment of braves」とは相反  
する雰囲気で、上手に書けるか不安です。

読んでみての感想、アドバイス、また誤字脱字の指摘など、是非お  
願いします。

## 其ノ零 ～一月ノ追憶～

人が死を迎ふる時、その肉体は土へと帰るが、  
生前にその者が抱きたりし想ひは現世に残る。

怒りや恨み、憎しみ、嫉み。

現世に残されし死人達の負の想ひは連なり、寄り添ふ、  
やがて「鬼」となりて形を成す。

「鬼」となりし負の感情の塊は、  
行き場のなき想ひを鎮める生贊を求めて生者を襲ふ、死の世界へと  
誘ふ。

死の世界へと誘はれし生者の魂は「鬼」の負の思念に取り込まれ、  
思ひ出も記憶も、理性も全て失ひ、「鬼」の一部となる。

鶴村の古い言い伝えより。

寝起きでぼんやりとした意識のまま、僕は布団に片手をついて身を起こす。

そして、視線を部屋の窓へ向ける。

空は雲に覆われていた。汚水を吸つた脱脂綿のような雲が、陽の光を遮つている。

今日の天気は曇り、か……雨は降るのかな？

そんなことを思いつつ、僕は布団を畳んで押入れに押し込んだ。

布団を片づけると、畳張りの床が姿を見せた。そして僕はもう一度、窓から外を眺める。

前々から思つていたことだけど、曇りの日は何だか村の雰囲気が変わつて見える。

軒を連ねた民家に、朝から畠仕事をする人々の後ろ姿、学校に向かう小学生達。

いつも見慣れている筈なのに、空が雲で覆われているというだけで全てが変わつて見える。

上手く言葉では言い表せないけど、陽の光に照らされていない村の風景はどこか無機質で、物悲しくて……何かに例えるとするとなら、白と黒だけで描かれた絵画のようだつた。

……なんて、何だか詩人みたいな言い回しだね。

ああそうだ、自己紹介を忘れてた。僕の名前は金雀枝えにしだいしき一月。

十五歳、職業（？）は高校一年生。

『金雀枝』つて名子はぜりつも珍しきらしへ、「変わった名前だね」とかよく言われる。

「文字田の『雀』といつ字を覚えるのには相当苦労したのを覚えてる。

『山田』とか『田中』とか、書きやすい名字だつたら良かったのに、なんてことを本気で思つた程。

この鶴村には、僕みたいにややこしい漢字が含まれた名字の人は少なく、

そういうつたシンプルな漢字から構成された名字の方が多かつたらしい。

鶴村。<sup>かづかむら</sup>それが僕が生まれ育つたこの村の名前。

都市部から離れた田舎にあるこの村は、田畠や民家が軒を連ねていて、少し寂れた雰囲気があるけど、自然が豊かで、きれいに澄んだ空気に包まれている。

四字熟語を使って表現するなら、『風光明媚』といつ言葉がよく似合つ農村だ。

田舎の割に人口は結構多くて、村の中には小中高の学校もある。

村の名前になつてゐる「鶴」（かづか）つて言つのは、ある鳥の名前。

この鳥はカチガラスやコウライガラスとも呼ばれ、大正十二年に佐賀県の天然記念物に指定されたといつ。

どうしてこの鳥が村の名前になつてゐるのかは分からぬ。村に何か縁のある鳥なのかなと思つたが、真相は不明だ。

一九九三年にはノロドム・シハヌークがカンボジアの国王に再即位した日だったり、

一九九九年には台風十八号が熊本に上陸した日だったりもする。

そして、この九月二十四日という日は、僕にとって一年の中でも最も因縁深い日だ。

畳の上に仰向けになつて、僕は机の上の写真立てに視線を向ける。写真に映つているのは面だけを外し、首から下を剣道着に包んだ一人の少年少女。

左側でぎこちない笑みを浮かべているのは中学一年だった頃の僕。その隣、右側に映つている女の子は秋崎琴音あきさきことね。ピースサインをとるこの女の子は、僕と同じ師匠の下で剣道の稽古に励んでいた子。

つまり僕と同門だった子だ。

思い返せば、琴音と僕が知り合つたのはお互いが小学三年生だった頃。僕が剣道場に通い始めて間もない頃だった。

入門したての僕が道場で稽古に励んでいる琴音を初めて見た時、正直に言つと僕は彼女を男の子だと思つた。

その理由は、面で顔が隠れていたというだけではなく、彼女の戦いつぶり。

覇気に満ちた掛け声と共に、相手を圧倒する彼女の姿は勇ましく、格好良かつた。

そこら辺の男の子よりも数倍は格好良い、そう言つてもいい程に。僕はあの子は男の子で、僕よりも年上で、何年間も剣道をやつている先輩なのだろうと思つた。

稽古終了後に彼女が面を外した時、短い髪型の女の子の顔が出てき

た時は心底驚いた。

さらに琴音が僕と同じ年で、同じ小学校の、  
それも隣のクラスに在籍していると知ったときははもつと驚いた。

知り合つてからは、剣道場だけでなく、小学校でもよく会つようになつた。

休み時間に一緒に遊んだり、たまに放課後に家に来る事もあった。  
いつしか琴音は、僕にとつて同門であると同時に、一番親しく、  
そして最も大切な友達になつていた。

入門して半年程経つた頃、僕は道場で一度、琴音と試合をした。結果は僕の完敗。

僕が繰り出す攻撃は一発残らず完璧に受け止められ、  
試合開始から一分と経たず、僕は面を打たれた。

あれは恐らく、『試合』にすらなつていなかつただろう。

僕は闇雲に竹刀を振り回し、琴音は僕の面を一撃打つだけのこと。  
実力の差は僕の思つていた以上に大きかつた。

彼女の強さだけでなく、自分の未熟さを思い知らされた瞬間だつた。

聞いた話によると、彼女は小学一年の頃から剣道を始め、  
そして二年という短期間であそこまで強くなつたのだという。  
琴音は別に、飛びぬけた才能を持つていた訳でもなく、  
入門した時は僕と変わらない、ただの小学生の女の子だつたらしい。  
彼女は必死に稽古に励み、それこそ血の滲むような努力の果てに、  
あそこまでの強さを手に入れたそうだった。

そのことを聞いてから、僕も必死に稽古に励んだ。  
強くなりたいという気持ちは勿論あつた。

だけどそれ以上に、琴音に少しでも追いつきたいという気持ちが強かつた。

厳しい稽古にくじけそうになる度に、

『琴音はこんな稽古を三年も積んできたんだ、男の僕が負けていてどうする』、

そう自分に言い聞かせて、気持ちを奮い立たせてきた。

剣道を始めてから、残り三年の小学校生活はあつという間に過ぎた。一年、二年、三年が経ち、気が付いた頃には六年生になつていて、卒業式を迎えていた。

卒業証書授与の時、名前を呼ばれるのを待つ間、僕は六年の小学校での思い出を振り返っていた。

入学式、遠足、運動会、学芸会、マラソン大会、友達の誕生日会に、クラスレク。

思い返せば思い返す程、六年の思い出が僕の頭に蘇ってきた。

式が終わってクラスでの帰りの会の後。

僕は家へ帰ろうと、卒業証書の入った賞状筒を片手に歩を進めていた。

その日は夕焼けで、空が鮮やかなオレンジに染まっていたのを覚えている。

僕の家が見えてきた頃だった、聞きなれた声で後ろから呼び止められた。

振り向くと、一人の女の子が手を振りながら、僕の方へと駆け寄つて来ていた。

その子は琴音だった。彼女は僕の近くに寄ると、いきなり僕の腕を掴んで駆け出した。

“一緒に来て欲しい所がある”、僕の手を引きながら、彼女は一言

だけ告げた。

それから彼女は、僕の事などお構いなしに目的地まで猛ダッシュした。

その時は、雪面で走り回る子供に引きずられるソリになつた気分だつた。

夕田に照らされた道をどれくらい走らされただろうか、

よつやく琴音が足を止めてくれた頃、僕は疲労で地面に倒れ込んだ。そこは通いなれた剣道場の前だつた。琴音は僕をここに連れてきたかつたらしい。

彼女はまた僕の手を引いて無理やり立たせ、道場の中へと引っ張り込んだ。

ずっと走りっぱなしだつたといふのに、彼女は疲れていなかつたのだろうか。

その日、稽古でいつも使つてゐる畳張りの剣道場には、僕と琴音以外は誰もいなかつた。

窓からは夕日の光が差し、部屋をオレンジ色に照らしてゐた。

嗅ぎなれた独特の畳のにおいに、壁にかかつた掛け軸。

僕がここに通い始めたころから、何一つとして変わつていなかつた。時計の長い針は、十一時前を指していた。

時間はまだ昼前だつた。この時間帯なら、人がいないのも納得できた。

僕ら一人の他に誰もいないといつだけで、道場がいつもより広く感じた。

琴音は、どうして道場に僕を連れてきたかたのだろう？

理由を尋ねようとした時、琴音が僕の面と竹刀を僕に向けて投げ渡

した。

戸惑いながらも一つの剣道具を受け止め、視線を琴音に戻す。

彼女は面をかぶって、竹刀を握っていた。

そして、僕をこの剣道場に連れてきた理由をよつやく教えてくれた。

彼女は、僕と剣道の試合がしたかったのだ。

思えば、琴音と剣道の試合をしたのは、入門したてだつた頃のあの  
一回だけだった。

小学校卒業の思い出作りにもなるかと思つた僕は、彼女の申し出を  
受けた。

その時は、僕も琴音も剣道具は面以外、籠手も胴も身に着けていな  
かつたので、

『面を打たれたら負け。それ以外の部位は狙わない』というルール  
を設けて試合を行つた。

試合の結果的には、僕の負けだった。

初めての僕との試合から三年、琴音はさらに強くなつていたのだ。

足さばきはより俊敏に、動きに無駄が無く、

打ちは素早くて、かつ針穴を通すように正確に、僕の面を狙つて來  
た。

琴音の攻撃を僕は必死に防ぐ。そして時に反撃を返す。

『互角』と呼べるかは微妙だった。だが少なくとも『試合』として  
成り立つてはいただろう。

開始から十分近く経ち、先に言つたように僕は負けた。

長時間の打ち合いでスタミナが切れ、集中力が途切れた瞬間を突か  
れた。

その一瞬の隙を突くセンスといい、途切れることのないスタミナと  
いい、琴音の凄さを改めて実感した。

試合が終わった後、面を外して壁際に移動し、背中を壁に寄り掛か  
らせる体制で座り込む。

呼吸を整えていると、僕の頬に冷たい物が押し付けられた。  
僕はそれを受け取った。その冷たい物は、五百ミリリットルのペッ  
トボトル飲料だった。

その中身は冷やされたお茶。

琴音の仕業だった、彼女は僕の隣に座る。

彼女の手には、僕に渡されたのと同じペットボトルがあった。  
そのキヤップを外そうとはせず、今の試合を踏まえて、僕にいくつ  
かの助言をくれた。

いや、あれは助言と言ひよりは『指導』に近かつただろうか。  
『足さばきを練習したほうがいい』とか、『体力をもつとつけた方  
がいい』とか……

剣道に関する事を、僕の隣でいろいろと講釈し始めた。

最早、僕には彼女の話をまともに聞ける程の体力は残っていなかっ  
た。

うんうん、と適当に相槌を打ちながら聞き流していたから、  
琴音が僕に何を教えていたのかはわからない。

だけど、彼女が最後に言つた言葉だけは、今でもはっきりと覚えて  
いる。

“中学に進学しても、一緒に剣道やろうね”。

琴音は僕にそう言つてキヤップを外し、ペットボトルを持った腕を  
僕の方へ伸ばした。

彼女が何をしたいのか察した僕も、キヤップをはずしてペットボト  
ルを伸ばす。

“ 小学校卒業、お互いにおめでとつ。 ”

その琴音の言葉の後、乾杯をするよう、互いのペットボトルを打ち付け合つた。

小学校を卒業した日の午後、夕日に照らされた道場の片隅。僕と琴音は、ペットボトルのお茶を飲み交わした。

中学に進学した後も、僕と琴音は変わらず剣道場に通い続けた。加えて僕達は中学校の剣道部に入部し、より本格的に剣道の稽古に励んだ。

その頃からだつただろうか、今までショートの髪型だつた琴音は髪を伸ばし始め、胸もふくらみ初めていて、小学校の頃よりもずっと女の子らしくなつていた。

僕はこれまで、琴音の事を一番大事な友達だとは思つていたけど、彼女にそれ以上の感情を抱いたことは無かつた。

その気持ちを自覚するのに、そう時間はかからなかつた。僕は、琴音の事が好きになつていたんだ。

真面目でひたむきで、優しくて、何事にも一生懸命な彼女のことが、いつの頃からか好きになつっていたんだ。

だけど、彼女にその想いを伝えようとはしなかつた。

今はまだ、琴音とは『仲の良い友達』という関係でいいと思つたから。

だから、抱いた想いは胸の中に仕舞つて、ただひたすらに強くなる十分だと思っていた。

だから、抱いた想いは胸の中に仕舞つて、ただひたすらに強くなる

ことを目指していた。

中学一年の夏、剣道の大会の決勝戦で、僕と琴音は竹刀を交えた。同じ中学校の者同士が決勝で戦うことは、これまでにも殆ど例がなかったという。

小学校三年の頃の最初の戦い、小学校の卒業式の日の一度目の戦い、そして、あの決勝戦で、僕達が戦うのは二度目だった。

はつきりと断言出来る。

その時の琴音は、剣道を初めてからこれまで僕が戦つたどの相手よりも強かつた。

三度目の戦い、やはり僕は敵わなかつた。

だけど、その試合が終わつた時、僕は悔しくなかつた。

悔しいどころか、むしろ満たされた気持ちだつた。

決勝戦という最高の場で、何年も共に稽古に励んだ親友の琴音と全力の力をぶつけ合つて、

そして負けたんだ。悔いなど、欠片一片たりとも無かつた。

負けたのに、嬉しかつた。

今でもどうしてだかわからないけれど、嬉しくて嬉しくてたまらなかつた。

閉会式が終わつて、僕は琴音と話していた。すると、僕の母親が会場まで迎えに来了。

母は琴音と僕が一緒にいるのを見て、バッグからカメラを取出した。そしてなんと、一人で記念撮影しないかと提案してきた。

僕の母親は、琴音と僕が小学校から仲の良い友達だということを知つてゐるのだ。

母の提案に、僕は泣つた。

周りに人が沢山いるのに女の子とシーシャなんて、なんだか恥ずかしかった。

けど、琴音の方はそんなことを気にする様子も無く、ノリノリで僕の腕を引っ張つた。

突然の出来事に戸惑つたけれど、内心は嬉しかった。

まさか、こんな場で好きな女の子と写真を撮れるとは思つていなかつたから。

その時に撮つた写真が、今も机の上の写真立てに飾られているこの写真だ。

この写真の琴音の笑顔を見ると、数年経つた今でも彼女が在りし時のことと思い出す。

道場で初めて知り合つた時のこと、一緒に剣道の稽古に励んだこと、この写真を撮つたあの決勝の日のこと……

数えきれない程の琴音との思い出が、碎かれた鏡の欠片を散らすようになく僕の頭に蘇る。

そして同時に、耐え難い程に胸が苦しくなる。

苦しくて悲しくて悔しくて、あの時の馬鹿だった自分のことが赦せなくなる。

……ん？ どうこうことなのかな？

ああそりだ、まだ……言つていなかつたね。

彼女は、  
琴音はまもつ  
……

この世には、  
いないんだ。

## 其ノ零 ～一月ノ追憶～（後書き）

どうでしたか？ 第零話は全て主人公の追憶でした。  
これからの中身ですが、あくまで「Fragment of broken  
vessels」の方がメインですので、更新頻度は遅くなると思います。  
この作品を読んでみての「ご感想があれば、是非ともお寄せ下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0205y/>

---

Nacht 置き去りにした一つの思い出

2011年10月29日16時25分発行